

の照応は義務的となると結論づけている。

このように考えれば、最初に見た (2b) のような補文の時制が主文と一致していない例を時制現象の例外と考えるよりは、むしろ補文の時制が必ず主文と一致しなければならない語彙的特質を持つ動詞を含む例こそ時制現象の例外と見た方がよいということになると主張している。このように、田中は、補文の時制選択と談話の主題との間の密接な関係を示し、更に、補文の断定性を考慮した (23) の仮説を用いて、既存の分析では扱えない例を説明している。

4. 結語

田中が主張しているように、時制の照応現象は、決して文内に止まらず、基本的には、談話の原則が深く関わった談話レベルの現象であること、更に、断定性という概念が、時制の照応現象の説明にも有効であると考ええる。

REFERENCES

- Comrie, B. 1986. "Tense in Indirect Speech," *Folia Linguistica* 20, 265-96.
Costa, B. 1972. "Sequence of Tenses in *That*-Clauses," *CLS* 8, 41-51.
廣瀬幸生。1986. 「発話動詞補文と話し手の主観的真偽判断」『英語青年』第132巻第7号, 2-6.
Hooper, J.B. 1975. "On Assertive Predicates," in *Syntax and Semantics*. vol. 4, 91-124. New York : Academic Press.
Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part IV. London : George Allen and Unwin.
中右 実。1985. 「意味論の原理 (19) : ライヘンバッハ時制論批判」『英語青年』第131巻, 第7号, 24-26.
Quirk et al. 1986. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
Riddle, E. 1987. *Sequence of Tenses in English*. Ph. D. dissertation. University of Illinois.
Ross, J.R. 1973. "Slifting," in *The Formal Analysis of Natural Languages*, 133-169. The Hague : Mouton.
Shrage, L. 1981. "Factivity and the Emotives," *Studies in Language* 5, 279-285.
Tanaka, K. 1988. "Sequence of Tenses in English," *Tsukuba English Studies* vol. 7, 61-73.
——— 1991. "Sequence of Tenses in English," *Studies in English Literature* vol. 67, 159-172.

からである。

- (29) Brigtie regretted that Sivash visited Southern California during the famine, but she later found that he didn't go and that there was no famine.
(Shrage, 1981)

これは、とりもなおさず、(28)で述べたように、regret の補文は必ずしも前提とされた読み、日本語に訳すなら「～であることを嘆く」という読みしかないという訳ではなく、話者の視点が入り込む余地のある非前提的な読み、つまり、日本語に訳すなら「～とって嘆く」という読みもあることを示している。

このように、regret の補文が非前提的な読みが可能な場合、つまり、断定的補文である場合には、時制の照応は自由であることになり、(27) は文法的と分析されると説明している。

それではなぜ、断定的補文であるにもかかわらず、regret の補文に時制の照応が起こっていないと、多少容認性が落ちるのであろうか。田中の (23) の仮定に立てば、(27) の例は完全に文法的と予測される筈である。

田中は、(27) の容認性が多少落ちるのは、断定補文（話し手の視点が入り込める補文）をとる動詞としての regret は、(30) のように say with regret, 日本語でいうと「～とって嘆く」で言い換えられることに起因すると考えている。

- (30) Dante said with regret that the earth is round.

(30) のように言い換えられた場合、say with regret は、副詞句 (with regret) によって修飾されているので、真の断定補文をとる動詞 (say) よりも、その分、情報価値が高くなっていると考えられる。そのため補文に話し手の焦点が行きにくく（視点が入りにくく）なり、補文の時制が主文の時制に照応しないと非文にはならないが、話し手の断定の焦点になりにくい分だけ真の断定補文よりも容認性が落ちると分析している。

以上見てきたように、補文の時制は主文の場合と同じく談話の首尾一貫性を保つように選択されるので、補文にだけ適用されるとする時制の照応規則は必要ではない。但し、補文に話し手の視点が入り込めないような語彙的性質を持つ動詞、例えば、whisper などの発話様態動詞はその限りではない。つまり、時制

発話様態動詞の補文に話し手の視点が入らないということは、補文に対する話し手の主観的眞偽判断を表わす、眞偽判断の主語副詞 (correctly や truly) のふるまいによって明らかであると述べている。

- (25) * John correctly / incorrectly mumbled that he was a genius in mathematics. (廣瀬, 1986)

このように、発話様態動詞の補文が非断定的であるということになれば、(23) の仮定から、発話様態動詞の補文は、時制の照応が義務的となるとし、第1の問題点を解決している。

次に (26), (27) の例に見られる容認可能性の差について検討している。

- (26) The ancient Egyptians knew that the earth is round.

- (27) ?Dante regretted that the earth is round.

ここで問題となるのは、(26), (27) は、ほぼ条件が同じ (主語は両者とも故人) であるのに、なぜ regret の補文は、時制の照応が起らないと容認性が落ちるのかということである。従来 regret といった動詞の補文は前提とされた読みしか持たない、つまり、話者の視点が入り込めない非断定的補文と考えられてきた。もし非断定的補文であれば、(27) の regret の補文も (24) の whisper の補文と同様に時制の照応が義務的となり、(27) は非文法的となる筈である。ところが、事實は、少し容認性が落ちるが、非文法的とはならない。そこで田中は、次のように考えている。

- (28) regret の補文は、必ずしも、補文の内容が前提とされた読みしか持たないということではなく、前提とされていない、つまり、話し手の視点が入り込める、非前提的な読みも持つ。

(28) の根拠として容認可能な (29) の例をあげている。もし、regret の補文に前提とされた読みしかないとするれば、(29) の例は、前半部の意味内容と後半部の意味内容が矛盾を起こし、容認不可能と判断される筈である。というのは、前半部で、Sivash が飢饉である南カリフォルニアを訪れたといっておきながら後半部で、実際は、飢饉もなかったし、彼はそこにも行かなかったと主張している

第2に、(19) に対する (20), (21) の容認性の差についてである。regret などの動詞の補文に現在時制を用いると、いくら談話を整えても、know などの場合ほどによくない。完全に非文法的にならないが、少し容認性が落ちる。

(19) The Ancient Egyptians knew that the earth *is* round.

(20) ?Dante regretted that the earth *is* round.

(21) Italy has a funny shape. ?Dante regretted that it *is* shaped like a boot.

以上の2つの事実は、先の Riddle (1978) をはじめとする3つの分析でも扱えないものであった。この事実を説明するため、田中は、典型的な時制の照応文と非照応文を吟味している。

(22) a. John said that Mary *was* sick.

b. John said that Mary *is* sick.

(22) では、従来からの観察通り、時制の照応が起こっている (22a) は、補文の内容は主文の主語の視点でとらえられ、一方時制の照応が起こっていない (22b) は、主文の主語の視点ではなく話し手の視点でとらえられているとし、この観察をもとに (23) を仮定している。

(23) 補文の中に話し手の視点が入り込める場合、つまり、that 節が断定的補文の場合は時制の照応は自由である。一方、補文に話し手の視点が入り込めないような場合、つまり、that 節が非断定的補文の場合は、時制の照応は義務的である。

この仮定に立ち、先程の2つの問題の第1、つまり、whisper などの発話様態動詞の補文は、時制の照応が必ず義務的であるという事実を検討している。

(24) * Miho whispered that her lover *has* big brown eyes.

whisper などの発話様態動詞の補文は、話者の視点が入り込めないので、(11) の定義により非断定的補文ということになる。

従関係のない主文の時制に合わせられることはない。一方、(16b)のように、古代エジプト人が談話の主題になっている場合には、現在時制ではなく過去時制の方が容認性が高い。この例の場合は、(16a)とは異なり、談話の流れから、補文ではなく主文に焦点が当てられる。これにより、補文は、依然として、主文と意味的な従属関係を保つ。そのために、補文の時制も主文に合わせられるのである。

以上の例から談話の主題が、補文の時制選択に関与しているのは明らかであると述べている¹。即ち、補文の時制の選択は、談話の首尾一貫性を守るために、先行文との関わりあいを考慮に入れて（つまり、先述の(12)の談話の原則に従って）、行われている。しかし、この談話の要因を考慮しても依然として、次の2つの事実が説明されないことを次に問題としている。

まず、発話様態動詞の補文に現在時制を用いると、(17), (18)が示す通り、談話の首尾一貫性を守るような談話の中に入れても依然として非文法的となる事実である。

(17) * The Zombie muttered that there *isn't* enough mayo on his pastami. (Ross, 1973)

(18) Italy has a funny shape. Dante muttered that it $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{was} \\ *is \end{smallmatrix} \right\}$ shaped like a boot.

1 田中は、(15), (16)の例以外に同じ趣旨で次の3つの例をあげている。

(i) a. Dante was born in 1265. He regretted that Italy $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{was} \\ ??is \end{smallmatrix} \right\}$ shaped like a boot.

b. Italy has a funny shape. Dante regretted that it $\left\{ \begin{smallmatrix} ??was \\ (?)is \end{smallmatrix} \right\}$ shaped like a boot.

(ii) A : Do you know what water is made up of ?

B : We learned in school yesterday that water $\left\{ \begin{smallmatrix} is \\ ??was \end{smallmatrix} \right\}$ a combination of hydrogen and oxygen.

(iii) A : There is someone who wants to see you.

B : Who is it ?

C : An Australian gentleman. He said his name $\left\{ \begin{smallmatrix} ??was \\ is \end{smallmatrix} \right\}$ Baldwin.

である彼女に話題の焦点を当てたいなら（言い換えれば、談話の主題が彼女であるなら）先行文との関わりあいから過去時制を選び、一方、話題を彼女から別の話題に移したい時には、先行文との関わりを絶つという意味で現在時制を用いると分析できると述べている。

(14)の例は、主文の時制の選択が談話の主題に影響されているものであるが、同じことが補文の時制選択にも見られることを次に示している。

- (15) a. Aunt, Helen. We learned in school that water *is* a combination of hydrogen and oxygen.
b. Aunt, Helen. We learned in school that water *was* a combination of hydrogen and oxygen. (Riddle, 1978)

Riddleによると、補文が現在時制の(15a)は、水に関する叙述であるのに対し、過去時制の(15b)は学校教育に関する叙述である。まさに、この観察は、補文の時制の選択が談話の主題に影響されていることを示していると述べている。次の(16)の例も、談話の主題が補文の時制選択に明らかに影響を与えていると考えられるとしている。

- (16) a. You don't know that the earth is round ! You are stupid, aren't you. The ancient Egyptians knew that the earth
 $\left\{ \begin{array}{c} ??was \\ is \end{array} \right\}$ round.
b. The ancient Egyptians were very clever. They knew that the
 earth $\left\{ \begin{array}{c} was \\ ??is \end{array} \right\}$ round.

田中は、(16)で、談話の主題がどのように補文の時制選択を決定しているかを次のように説明している。

(16a)は、地球が丸いことが主題となった談話である。その場合、補文の時制は現在である方が容認性が高い。これは、話し手の断定の焦点が、談話の首尾一貫性の原則から、主文ではなく、談話の主題に関係した命題内容（地球に関すること）を持つ補文に当てられることに起因する。補文が断定の焦点になることにより、補文は意味的に主文から独立する。そのため、補文の時制も意味的に主

性に欠けるため、(10)の廣瀬(1986)の断定性の定義に従って、(11)のように断定的補文、非断定的補文を定義している。

- (10) 述語が断定的であるというのは、その補文命題が話し手の主観的真偽判断の対象となりうる場合をいう。
- (11) 話者の視点が入れるもの、つまり、話者の断定の焦点になれるものを断定的補文、一方、話者の断定の焦点になれないものを非断定的補文という。

談話の要因については、(12)のような談話の首尾一貫性の原則 (principle of discourse cohesion) を提案している。

- (12) (i) 談話内の個々の文の内容は、談話内の統一された主題にそったものでなければならない。
- (ii) 談話内の個々の文は、必ず、談話全体をつかさどる一定の時の視点から述べられなければならない。

更に、この談話の原則に基づいた、次のような談話の取り決め (convention) に、話し手、書き手は、従わなければならないと考えている。

- (13) 話し手は、談話の流れにそった発言をしなければならない。

田中は、次に、この枠組みを用いて、談話における時制の照応現象を考察している。時制現象一般を談話レベルで分析する考え方は、Quirk et al. (1986) に基づいていると述べ、次のように説明している。Quirk et al. によれば、時制の選択が明らかに談話の主題に影響を受けている例がある。

- (14) She told me all about the operation on her hip.
 - a. It *seemed* to have been a success.
 - b. It *seems* to have been a success. (Quirk et al., 1986)

Quirk らの観察によれば、(14a) は、it seemed to HER と解釈され、(14b) は it seems to ME と解釈される。このことは、話し手が、手術を受けた本人

る。Riddle の分析には、次の 2 つの問題があると田中は指摘している。第 1 は、先の(7)で見たように、whisper などの発話様態動詞の補文は、いくら文脈が整っても時制の照応は義務的であるという事実が説明できない。第 2 に、(8)の例では、補文の時制が現在と過去では容認可能性の違いが出てくるのに対し、(8)と条件がほぼ同じである(9)では容認可能性の相違が出てこないということが説明できない。

(8) Dante regretted that Italy $\left\{ \begin{matrix} \text{was} \\ ?\text{is} \end{matrix} \right\}$ shaped like a boot.

(9) The ancient Egyptians knew that the earth $\left\{ \begin{matrix} \text{was} \\ \text{is} \end{matrix} \right\}$ round.

Riddle の分析に従えば、(9)の古代エジプト人もダンテと同様に、故人であるから現在と関わりを持つことはできない。従って、(9)においても、(8)と同様、補文の時制が現在であると容認性が落ちると予測される。ところが、実際、(9)では、全く容認性が落ちない。結局、Riddle は語用論的要因に頼りすぎているために、この違いが説明できないといえる。即ち、時制の照応は、場合によっては、文内の性質、特に動詞がとる補文の意味的特質が決定的に関わっていることもあると考えなければならない。以上の田中による 2 つの問題点の指摘は、正しいものである。

第 2 節で明らかになった Costa, Comrie, Riddle の分析の問題点を田中はどのように解明するのであろうか。

3. 田中の分析

田中は、時の解釈及び時制の選択に次の 5 つ、即ち、時制体系、時の副詞、述語の表わす状況の類型、述語の意味分類、談話の要因が影響していると考えている。この中で田中の分析に直接関わる時制体系、述語の意味分類、談話の要因を簡単に説明している。

まず、時制体系は、中右(1985)にのっとり、文レベルでは、発話時と出来事時の 2 つだけで表示する SE 体系を仮定し、談話レベルの表示にはこの 2 つに加えて、談話における時の視点 (temporal perspective in discourse) が必要であるとしている。

又、述語の意味分類については、動詞がとる that 節を断定的補文と非断定的補文の 2 つに分ける立場をとっている。Hooper (1975) の分析は意味論的妥当

2.2 Comrie の分析の問題点

Comrie (1986) は、次の規則によって時制の照応に関わる全ての現象を説明しようとしている。

(6) 時制の照応規則

主文の時制が過去であれば、補文の時制もそれに合わせて過去になる。但し、補文の内容に恒常的性質が認められれば、その限りではない。この時に限り時制の照応は自由である。(pp. 284-5)

田中は、この分析にも、問題点が少なくとも2つあることを指摘している。第1に、(6)は、補文の内容に恒常的性質が認められれば時制の照応は起こっても起こらなくてもよいとしているが、どのような場合にどのような時制がより適しているかという問題は少しも考慮されていない。第2に、Comrie の規則では、次の例の非文法性を説明できない。

- (7) * Miho whispered (muttered, murmured) that her lover *has* big brown eyes.

(7)の補文は、Comrie の恒常的性質に属する人間の目の大きさや色のことを述べている。それにもかかわらず、(7)は時制の照応が起こらないと非文となる。このことは、時制の照応現象は(6)のような目の粗い規則では扱えないことを示している。Comrie の分析に対する田中のこの2つの欠点の指摘は、妥当なものである。

2.3 Riddle の分析の問題点

Riddle(1978)の分析も、田中に基づいて考察する。Riddle は Costa, Comrie と異なり、時制の照応を文を越えた現象としてとらえている。Riddle は、主文の時制が過去で補文の時制が現在の時、つまり、時制の照応が起こっていない時には、話し手の信念、主語の関与性、未定状況という3つの含意があり、話し手が、聞き手にこれらの含意を伝えたい時、時制の一致が破られるのに対し、そのような含意を伝えたくない時、時制の一致が起こるという分析をしている。つまり、時制の照応現象を左右しているのは、もっぱら語用論的要因とするものであ

第3に、談話と文内の要因が関わっているとする田中(1988, 1991)の分析である。以下、第2節では、Costa, Comrieの分析とRiddleの分析を検討し、それらの分析の問題点を明らかにする。第3節では、その問題点を解明し、談話のレベルで照応現象をとらえようとする田中(1991)¹の分析を概観し、検討する。

2.1 Costaの分析の問題点

Costa(1972)は、叙実性(factivity)という概念を用いて、(3)のように動詞をA動詞とB動詞の2つに分類している。

- (3) A動詞: forget, mention, regret, realize, show, say, report
B動詞: know, think, believe, hope, allege, be aware

Costaは、A動詞(主として、叙実動詞(factive verb))は時制の照応は自由であるが、B動詞(主として、非叙実動詞(nonfactive verb))は時制の照応は義務的、つまり、補文の時制は必ず主文に一致させなければならないとしている。田中は、この分析には2つの欠点があると指摘している。第1は、(3)のように動詞を分類する独立した動機がないことであり、表面的には叙実性の有無という基準で分類されているように見えるが、実際は、色々な種類の動詞が入り交じっていて、その場限りの分類に止まっている。第2の欠点は、次のJespersenの例の文法性を説明できないことである。

- (4) It was firmly believed that the frontal region *is* the seat of the highest intellectual process. (Jespersen, 1931)
(5) John knew that it *is* the feminine to lead conversation. (ibid.)

Costaの分析によれば、believeもknowも非叙実動詞であるから、時制の照応は義務的な筈である。ところが、(4)、(5)においては、時制の照応は見られず、Costaの予測に反している。このことは、主文の動詞の叙実性が、補文の時制の選択を決定するものではないことを示している。この田中の欠点の指摘は、正しいものである。

1 今後特記しない限り、田中は、田中(1991)を指す。

英語における時制の照応

佐 保 玲 子

1. 序

時制の照応とは、補文の時制を主文の時制に合わせる現象のことをいう。英語における時制の照応現象に関しては、これまで様々な分析が提案されてきた。本稿は、田中 (1991) の分析に基づき、これらの既存の分析を批判的に概観し、時制の照応に関しては、談話のレベルからとらえる必要があることを検討するものである。本稿では、特に、主文の時制が過去である場合の補文の時制選択について考察する。

従来時制の照応は、(1)のような直接話法から(2a)のような間接話法に書き換えられる時に見られる文内の現象としてとらえられ、(2b)のように時制の照応が起こっていない例は、時制の照応の例外と見なされてきた。

- (1) Miho said, "I am pregnant."
- (2) a. Miho said that she *was* pregnant.
b. Miho said that she *is* pregnant.

田中 (1991) は、時制の照応現象は、決して文内にとどまる現象ではなく、談話の原則 (談話の首尾一貫性) が大きく関わっている現象であり、更に、談話レベルでこの現象をとらえれば、(2b) も決して時制の照応現象の例外ではない、つまり、時制の照応が必ずしも、無標の時制現象ではないと主張している。この主張は妥当なものであろうか。まず、既存の時制現象に対する分析を概観した後で、この主張を考察することにする。

時制の照応現象に関する既存の分析には、大別して3つある。第1に、文内の要因が補文の時制の選択に関わっているとする Costa (1972), Comrie (1986) の分析。第2に、語用論的要因が関わっているとする Riddle (1978) の分析。